様式Ｃ-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２０年　６月　２日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：18520175
研究課題名（和文）　英米文学におけるテクノロジーとメディアの表象に関する研究
研究課題名（英文）　A Study on the Presentation of Technology / Media in English and American Literature

研究代表者
氏　名（アルファベット）林　文代　（HAYASHI　FUMIYO）
所属機関・所属部局名・職名 東京大学・大学院総合文化研究科･教授
研究者番号　20139497

研究成果の概要：本研究は、新しい文学研究のあり方を、英米文学とテクノロジーやメディアの表象に関する観点から探るものである。狭義な意味での文学研究の枠を越え、社会科学的、自然科学的要素などの視野も含め、テクノロジー（たとえば映画）やネットなどのメディアと文学の多様な関係について論証を試みた。このような研究は、まだ日本では新しい分野であり、さらに今後研究が必要であるが、研究成果欄に記載したように多くの成果をえることができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,200,000	0	1,200,000
２００７年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	600,000	3,800,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・英米･英語圏文学
キーワード：英米文学、メディア、テクノロジー

１．研究開始当初の背景

（1）近年の文学研究は従来の伝統的なものとは異なり、文学以外の研究分野を取り込んで、新たな文学的可能性を探る傾向があることが認識された。
（2）英米の文学研究において、このような研究が行われているかについてみると、文学以外の人文科学的な要素はもちろん、社会科学的、自然科学的な分野などにも関連する研究が行われていることがわかった。
（3）一方日本においては、いまだ文学中心的な傾向が強く、他分野との関連で論じることはそれほど多くないと思われた。
（4）従来の文学分野を中心とする研究は当然ながら重要であるが、同時に他分野の方法も取り込むことにより、新たな文学研究の可能性が提示されることが期待されるとの認識から研究を開始することになった。

２．研究の目的

（1）日本の英米文学研究は、欧米の文学研究の動向に常に注目してきた。特に 20 世紀後半に次々と現れた構造主義、フェミニズム、ディコンストラクション、精神分析、新歴史主義、クイア･セオリー、ネイチャー･ライティング、ポストコロニアリズムなど、多様な批評理論に基づいた研究がなされている。

本研究は、このような批評理論を必要に応じて利用すると同時に、それに加えて、たとえばメディアの発達による監視社会のあり方を社会科学的、統計学的に捉えるのではなく、文学的に捉えることを試みる。同様に、機械やコンピュータ、遺伝子工学などの自然科学的問題が、個人のアイデンティティのあり方や社会（人間関係）のあり方をどのように変貌させたか、そしてそれがどのように文学的問題として表象されてきたかを検討する。

（2）本研究の特色であり、また独創的な点は、テクノロジーやメディアと人間の関係という、従来は文学研究の中心的関心として取り上げられることがそれほど多くなかった問題を、重要な文学的問題として研究するところにある。この研究の結果、テクノロジーやメディアと人間の関係の文学的表象は、それらが高度に発展した近年の文学作品に特に顕著に見られるはずだが、それは突然現れたものではなく、18 世紀のゴシック小説などにも起源を持ちつつ、連綿と続いていることが明らかになるだろうと予想される。

本研究の意義は、未曾有のテクノロジーとメディアの発達によって変貌を余儀なくされている現在の世界環境の変化が、過去においてどのように存在し、進行してきたのかということを、具体的な英米文学作品の分析を通して明らかにするところにあると考える。

（3）英米の文学研究においては、本研究のように文学の研究とテクノロジーやメディアの関係に注目した研究は、文化研究と関連しあう形で存在している。特にモダニズムとの関連で論じられるものが多いが、最近は対象を 19 世紀、あるいはさらにより古い時代にまでさかのぼって論じるものもある。また逆に、サイバースペースと文学といった最新のコンピュータと人間の関係を論じるもの、映画論などを含む広い意味でのメディア論との関係で論じるものなどが、特にアメリカの研究者によって著されていることは注目される。

そのような英米の文学研究の視点を取り込んで、新たな知見を得ることを研究の目的とする。

３．研究の方法

（1）研究の性格上、基本的に資料収集が必要不可欠である。したがって 3 年間の研究期間を通して、英文学関係、米文学関係、テクノロジー関係、メディア関係を主とする書籍、DVD などの資料収集を積極的に行った。この分野の資料は英米において毎年多く出版されるため、収集には毎年かなりの時間とエネルギーを費やした。

（2）研究代表者は２００６年アメリカ合衆国ミズリー州のサウスイースト･ミズリー州立大学において開催された国際シンポジウム「フォークナー･トウェイン･コンフェレンス」において研究発表、及び研究者との交流を行った。資料収集に加えてこのような海外の研究者との意見交換は有意義であった。

４．研究成果

研究期間中にある程度の成果を、論文、学会発表、図書などにまとめることができた。その主なものについて、発表時期の順に、以下にまとめる。

（1）２００６年に出版された『文学』１１・１２月号(岩波書店)に掲載された論文「反転するアイデンティティ―アメリカ映画と小説におけるステレオタイプ考」では、いくつかの論点を展示した。

①映画とその原作である小説の比較を通して、小説形態と映像というテクノロジーによる表象の違いを検証した。具体的にはフィリップ・K・ディックの SF 短編小説「マイノリティ・リポート」とその映画化されたものが、表現できるものとできないものをどのように表象しているかについて論考した。

②さらに近未来のメディア社会、とりわけメディアによる監視社会の予想図が、小説と映画によりどのように提示されているかについて論じた。

③フォークナーの小説『八月の光』や『響きと怒り』においても、人種問題が人々の噂など原初的なメディアの方法によりどのように構築されているかを論証した。それにより文学作品がいかに社会性の高いものであるかを提示した。

（2）２００６年１０月にアメリカ合衆国ミズリー州のサウスイースト・ミズリー州立大学において開催された国際シンポジウム（フォークナー・トウェイン・コンフェレンス）において“‘I've got to spend half my time being a dam detective…’: Faulkner, Twain, and Their ‘Detectives’”という発表を行った。

①フォークナーやトウェインの小説に現れる探偵たちが、人種やアイデンティティの問題についてその時代のテクノロジー（指紋、人種に対する偏見など生物学的、生理学的視点）を取り入れていることの意味について検討した。

②ここでもまた共同体における伝達（メディア）の重要性が確認された。

（3）２００８年に出版された『人間の安全保障』（東京大学出版会）に収録された論文「差別・暴力の表象と他者――エドワード・サイードのメッセージ」においては、「２００１年9月１１日」の同時多発テロが世界に与えた衝撃の大きさとそれを伝えるメディアの関係を通して、現代社会がどのような問題に直面しているかということを、批評家サイードの著作『人文学と批評の使命』と関連付けながら論考した。要点は以下の通り。

①世界情勢という社会科学的問題が、同時多発テロというテクノロジーの問題と密接に関わること

②それを論じるサイードは人文学が現代社会においてどのような役割を果たせるかについて論証すること

③以上の点から、人文学、社会科学、メディア、テクノロジーなどの密接なかかわりを検討した。

（4）２００８年６月に東京大学で開催された「人間の安全保障」プログラムのシンポジウム「人文知に何ができるか」においては、実際世界中で起こっている紛争、難民、貧困などの問題に直接関わる仕事に従事する国際的な活動家たち（社会科学的分野）にとって、人文学が現実的問題処理に役立つと思えないが、あるテレビ番組で報道された活動家が文学作品の愛好者であることから、間接的に人文科学と社会科学の関係を考察した。

（5）２００８年１０月に福岡大学で開催されたフォークナー協会のシンポジウム「フォークナーと映画」において「モダニズムと映画」という発表を行った。この発表の論点は以下の通り。

①２０世紀初頭のモダニズムの時代には、映画はすでに大衆化されており、その新しいテクノロジーが作家たちに影響を与えたことを確認した。

②具体的にフォークナーの作品の中に、映画、あるいはテクノロジーとしての映画的技巧や場面がどのように提示されているかについて、いくつかの作品の詳細な分析を通して論証した。

（6）２００９年２月に出版された『英米小説の読み方・楽しみ方』（岩波書店）は、研究代表者の編著である。収録された論文は「文学テクストとメディア――『マクベス』、『八月の光』そして「マイノリティ・リポート」」、と「歴史と文学：南北戦争の描き方――『風とともに去りぬ』と『アブサロム、アブサロム!』である。それぞれの要点は以下の通り。

①時代も形式も異なる三作品において、メディア（うわさ、伝聞、予言、ネット社会など）が人間の運命や社会にどのような影響を与えるか、そしてそれを文学作品や映画はどのように描いているかを論証した。

②ベストセラー小説と難解な小説の違いはどこにあるのか。また映画化によって小説がどう変化するか、あるいは映画化が不可能

な小説はなぜそうなのかを考察した。
③歴史的事件（戦争など）は文学作品、映画などにどのように描かれるか、それは史実とどのように異なるか、その変化はどのような意義を持つかについて論証した。

（７）現在も研究を継続しており、近い将来図書などにまとめる予定のものとしては以下のものがある。
①人間（生物）と人工物（非生物）の関係は何かという問題は、自然科学の分野に限られるものではなく、アイデンティティの問題と深く関わるため、実は文学と密接に関係があること。このテーマについてはストイキツアの『ピュグマリオン効果』（美術論）や多くの映画論、ジョセフ・ルドーの『シナプスが人格をつくる』（神経科学）など多くの資料が参考となる。
②同じように文学と密接に関わる問題を扱うものにジャン＝ジョセフ・クロード・グーの『哲学者エディプス』、カトリーヌ・マラブーの『わたしたちの脳をどうするか』、ジュディス・バトラーの『自分自身を説明すること』など、哲学的な視点と社会科学的、自然科学的視点の渾然一体となった論考がある。これらを参考にしながらテクノロジー、メディア、文学の関係をさらに研究する。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２　件）
①林文代、「反転するアイデンティティ―アメリカ映画と小説におけるステレオタイプ考」、『文学』１１・１２月号、１１６－１２６、２００６年、依頼論文により査読なし。

②斎藤兆史、「昔の英語教科書から何が見えるか」、『英語教育』、１２月号、３０－３１、２００６年、依頼論文により査読なし。

〔学会発表〕（計　６　件）
①林文代、「モダニズムと映画―フォークナーの場合」、フォークナー協会シンポジウム、２００８年１０月１０日、福岡大学。

②林文代、「人文知に何ができるか」、東京大学人間の安全保障プログラム・シンポジウム、２００８年6月２８日、東京大学。

③斎藤兆史、「英国小説のキャノンと帝国」、日本英文学会関東支部例会シンポジウム、２００８年4月２６日、東京大学。

④林文代、「言語態研究の可能性：小説、映画、メディア」、言語情報科学専攻主催シンポジウム、２００７年１０月２０日、東京大学。

⑤斎藤兆史、「言語態研究の可能性：翻訳」、言語情報科学専攻主催シンポジウム、２００７年１０月２０日、東京大学。

⑥林文代、“I've got to spend half my time being a dam detective…’: Faulkner, Twain, and Their ‘Detectives’”, Faulkner/Twain Conference, ２００６年１０月２０日、 サウスイースト・ミズーリ州立大学、アメリカ合衆国。

〔図書〕（計　５　件）
①林文代（編著）、岩波書店、『英米小説の読み方・楽しみ方』、２００９年、２０２ページ。

②林文代（共著）、東京大学出版会、『人間の安全保障』、２００８年、６７－７８。

③斎藤兆史、東京大学出版会、『翻訳の作法』、２００７年、１８４ページ。

④斎藤兆史、筑摩書房、『これが正しい!英語学習法』、２００７年、１４２ページ。

⑤林文代、（共著）、ミネルヴァ書房、『もっと知りたい名作の世界①若草物語』、２００６年、１１６－１２６。

６．研究組織
(1)研究代表者
林　文代（HAYASHI　FUMIYO）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
20139497

(2)研究分担者

(3)連携研究者
斎藤　兆史（SAITO YOSHIFUMI）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
80162246